

ISSN: 2189-793X

Amami Station, International Center for Island Studies, Kagoshima University

とうしよけんぶんしつ
島嶼研分室だより

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 21

2025 年 10 月

研究員紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p2
奄美分室に着任した常駐研究員の自己紹介	菊池隼人
研究紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p3-7
Researching UNESCO Heritage and Tourism in Amami Oshima（奄美大島の 世界遺産登録と観光利用について）	Evangelia Papoutsaki
シマで戦争について考えています	兼城糸絵
分室活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p8-11
学生島体験！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p12
成長と感動の奄美	小池一輝



奄美分室に着任した常駐研究員の自己紹介

きくちはやと
菊池隼人

(国際島嶼教育研究センター奄美分室)

令和 7 年 6 月に奄美分室に着任した、菊池隼人と申します。

私は幼いころからリスやネズミといった動物(齧歯類)に親しみを感じ、大学進学後もそのような生き物を対象に研究を続けてきました。目標は、図鑑に記されるような、各種の情報を一つひとつ埋めていくことです。その過程で、種を超えた共通の現象を見出したり、保護や管理といった社会的課題に対して、意思決定を支える情報を提供したりできればと考えています。

これまで私が研究してきたリスの仲間というのは、人間にとって大きな害も益ももたらさないため、世の中からあまり求められていない存在と見なされがちでした。指導教官からも「リスの研究をしても職はない」と言われたことがあります。

しかし、奄美群島を含む中琉球には、学術的に貴重で希少な齧歯類が複数生息しており、さらにこの地域は国立公園や世界自然遺産に指定されています。自然との共生が社会的に強く求められているここなら、自分の研究も社会に役立てるのではないかと思います。学位取得後は琉球大学に籍を置き、中琉球固有のネズミであるケナガネズミの生態の研究を沖縄島で始めました。そのご縁から南西諸島と関わるようになり、このたび国際島嶼教育研究センター奄美分室でお世話になることとなりました。

哺乳類の調査には長い時間を要しますが、私の任期には限りがあります。それでも周囲の皆様の力を借りながら、奄美における「人と自然の共生」に役立つような知見を得たり、島の生物相が成立する仕組みを少しでも明らかにしたりしたいと考えています。

その過程で私が気づかされたのは、奄美群島を舞台に、生きものに関心を寄せ、観察や記録を長年にわたり積み重ねてきた方々、島の生きものを守るために尽力してきた方々が、プロ・アマチュアを問わずとても沢山いるということです。その営みの大きさを前にすると、途方もない思いに駆られますが、時間の許す限り、残された資料を探し出し、読み解き、さまざまな方々の話に耳を傾けながら、その先を見据えるための手がかりを示していければと願っています。

また、幼いころからの興味を今日まで持ち続けられたのは、生き物の魅力を教えてくださった多くの方々のおかげです。そのため、島嶼研で行われる教育や普及活動にも積極的に携わり、生き物に関心を持つ人々が学びを深めるきっかけを広げたいと思っています。それが人と自然が共生できる社会づくりの一助となれば幸いです。

最後に、奄美の皆様には日々の生活のなかで多くのお世話になっております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



菊池隼人氏（奄美分室にて）

研究紹介①

Researching UNESCO Heritage and Tourism in Amami Oshima

Evangelia Papoutsaki

(Unitec Institute of Technology)

奄美大島の世界遺産登録と観光利用について

パポサキ・エヴァンゲリア

(ユニテック工科大学)

Since 2017, I have been visiting the Amami Islands, initially as an International Research Fellow at Kagoshima University's International Center for Island Studies. I was fortunate to be introduced to Amamian culture by Professor Emeritus Suetō Kuwahara, with whom I have collaborated on ethnographic research exploring the islands' communicative ecology and information ecosystems.

This year, under a Japan Foundation Research Fellowship, I returned to Amami Oshima to investigate the impact of its UNESCO World Natural Heritage designation and emerging tourism trends. This study addresses a gap in the literature concerning the intersection of tourism, communication, and island studies within the Japanese context. Specifically, it examines how “islandness”—the unique socio-spatial condition of being an island—shapes tourism information ecosystems and, conversely, how tourism influences local narratives. The research also explores the dynamic interplay between natural/cultural heritage and the negotiation of external and internal priorities. Amami Oshima serves as a compelling case study for

understanding how island identity is both affirmed and renegotiated within its distinct micro-communicative ecology and eco-cultural setting.



Amami FM is an amazing community radio that has done much to promote and revitalize island music, dialects and culture in general. It was a true honour to get invited to talk by Yoko Watari, the radio's leading reporter, to talk about our research.

あまみエフエムは、島の音楽や言葉、文化全般の振興と活性化に多大な貢献をしている素晴らしいコミュニティラジオ局です。そんなラジオ局の看板リポーター・渡陽子さんにお招きいただき、私たちの研究についてお話しする機会をいただけたのは本当に光栄でした。

Over several weeks of fieldwork, I employed ethnographic methods, including photo-mapping changes in the port area, engaging with cruise ship visitors, and analyzing tourism information materials and services. Through interviews with community members and key informants, several trends emerged regarding the communicative ecology of tourism in Amami Oshima, including how natural heritage tourism impacts and reshapes local communication patterns; how residents reconstruct their island identity through tourism promotion and resistance (a paradoxical dynamic); how tourism and the UNESCO effect influences and galvanizes island narratives; how island communities negotiate the rising tensions around tourism related developments including the arrival of large-scale resort construction and the introduction of behavior rules; and the role of key 'storytellers/ island influential voices' play in producing and negotiating these narratives. Amami stands at an important moment in its natural heritage tourism development.

Amami Oshima stands at a pivotal moment in its natural heritage tourism development. This presents an opportunity to craft a unique eco-cultural identity while engaging visitors through sustainable practices that align with ecotourism principles—avoiding the pitfalls of overtourism. As one interviewee aptly noted, “Amami should not make it so easy for everyone to come.”

This fieldwork has been both intensive and highly productive, capturing early transformations in the island's communicative landscape

following UNESCO designation. I am deeply grateful for the support of the Amami Research Station, which provided accommodation, workspace, and invaluable resources. A particular highlight for this fieldwork was hosting my SICRI co-convenor, Dr. Meng Qu of Hokkaido University, whose expertise in island tourism greatly enriched this research. It gave much pleasure to introduce a fellow researcher to Amami Oshima!



With my good friend, Futoshi Hamada, a man with a passion for Amami's kurousagi!

アマミノクロウサギに情熱を注ぐ友人、
浜田太さんとともに。

私は 2017 年から、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの研究員として奄美群島を訪れるようになりました。ありがたいことに、奄美の文化については、長年の協力者である桑原季雄名誉教授から多くを学ぶ機会に恵まれました。そして私たちは、島嶼における「コミュニケーションおよび情報の生態系」という概念に関する、民族誌的研究を共同で行ってきました。

今年は、国際交流基金のリサーチ・フェローシップのもと、再び奄美大島を訪れ、ユネスコ世界自然遺産登録がもたらした影響と、新たに生まれつつある観光の潮流について調査を行いました。本研究は、日本における観光、コミュニケーション、島嶼研究の交差点に関する先行研究の空白を埋める試みです。具体的には、「島嶼性」（島という特有の社会的・空間的条件）がどのように観光に関する情報系を形づくるのか、そして逆に観光が地域住民の自己認識にどのような影響を与えるのかを検討しています。

さらに本研究では、自然および文化遺産に対する島の内部・外部の人々の関わりにおいて、それぞれが優先する事項が異なる場合、双方がそれをどのように調整しているのか、という部分にも焦点を当てています。奄美大島は、この土地独自の人・文化・自然の関わりの中で、島のアイデンティティがいかに再確認され、再構築されていくのかを理解するための魅力的なケーススタディの場となっています。



At Harahabuya's shop in Naze, I love the snake designs and how they reflect the island's eco-philosophy.

名瀬の「原ハブ屋」にて。この店のヘビのデザインが大好きです。デザインが島の自然観を反映しているところにも惹かれます。

数週間にわたるフィールドワークでは、港周辺の変化を写真でマッピングしたり、クルーズ船の来訪者と交流したり、観光に関する情報素材やサービスを分析したりするなど、民族学的手法を用いて調査を行いました。地域住民や主要な情報提供者へのインタビューを通じて、奄美大島における観光のコミュニケーション系に関して、いくつかの傾向が明らかになりました。

たとえば、自然遺産観光が地域のコミュニケーションのパターンにどのように影響し、変化をもたらしているのか。観光振興と、それに対する抵抗、という双方の活動が存在する中で、住民がどのように島のアイデンティティを再構築しているのか。観光業と「世界遺産効果」が島民の自己認識にどのような影響を与え、活性化させているのか。大規模リゾート建設や新たな行動ルールの導入など、観光開発をめぐる緊張の高まりに、島のコミュニティがどのように向き合い、折り合いをつけているのか。そして、島の自然や文化に関する物語を紡ぎ、語り継ぐ「語り部」や「影響力のある島民の声」が、そうした島民の認識の形成とステークホルダー間の交渉にどのような役割を果たしているのか、といった現象が挙げられます。

奄美大島は現在、自然遺産観光の発展において極めて重要な局面にあります。これは、独自のエコカルチャー的アイデンティティを形成し、持続可能な観光の実践を通じて訪問者と向き合う絶好の機会でもあります。そのためには、オーバーツーリズムの弊害を避け、エコツーリズムの理念に沿った対応が求められます。あるインタビュー参加者が語った「奄美は誰にでも簡単に来られる場所になってはいけない」という言葉は、まさに本質を突いたものだと感じました。

今回のフィールドワークは非常に建設的かつ実り多いものであり、世界自然遺産登録後に、島内の異なる立場の人々の交流が、どのように変わり始めるの

かを捉えることができました。フィールドワークにあたって、宿泊・作業スペースの提供やさまざまな支援をいただいた奄美分室には心より感謝申し上げます。また、今回の調査のハイライトのひとつは、北海道大学の Meng Qu 博士を迎えて共同調査を行えたことです。彼は SICRI (Small Island Cultures Research Initiative) の共同運営者でもあり、島嶼観光に関する豊富な知見は本研究に大きな示唆を与えてくれました。そして奄美大島という場所を紹介できたことも、大きな喜びとなりました。(日本語訳：菊池隼人)



With my guest, Dr Meng Qu and Yuko Yoshikawa, a Horokan member of staff during our visit.

ゲストの Meng Qu 博士、放浪館スタッフの吉川祐子さんと一緒に。

奄美分室から見える景色—クロサギさっちゃんの狩り—

奄美分室の窓からは、傍を流れる新川の河口がよく見えます。潮が引くと浅瀬を泳ぐさまざまな魚をみることができて、いつまで眺めていても飽きません。その河口に毎日のように姿を見ているのがクロサギという鳥です(右写真)。同じ個体が訪れているのかは分かりませんが、分室では親しみを込めて「さっちゃん」と呼んでいます。

さっちゃんが狙っているのは、浅瀬を泳ぐ小魚たちです。魚の群れを見つけると、水しぶきを上げながら駆け寄り、逃げる魚の群れにくちばしを突っ込みます。駆け寄る段階で魚の大半は逃げってしまうので、上手な狩りとはとても思えないのですが、それでも魚を捕まえる姿が時々見られるので、そんな狩りをしているように生きていけているようです。

私が分室に着任した 6 月には、さっちゃんはまだ若鳥のようでしたが、夏を過ぎるころにはすっかり成鳥の姿になりました。成長とともに狩りの腕も上達していくのでしょうか？分室のメンバーで、今日も窓から見守っています。(菊池隼人)



水際で獲物を探すさっちゃん



分室の窓から見える新川の河口

研究紹介②

シマで戦争について考えています

かねしろいと え
兼城系絵

(鹿児島大学法文学部)

奄美群島はかつて本土防衛という観点から、軍事的に重要な場所であるとみなされてきました。そのため、明治から昭和にかけて数多くの軍事施設がつくられたほか、各学校には奉安殿がつくられました。戦争が終わると、軍事施設の多くは壊されたり、別の施設に転用されたりします。しかし、奄美群島の場合、いくつかの要因によって破壊を免れたこともあり、数多くの旧軍事施設が比較的良好な状態で残されています。現在、それらの一部は戦争遺跡として整備され、見学ができるようになっています。

その一方で、奄美の戦争遺跡に関する調査はまだ十分に進んでいないといえません。そこで、奄美の人々が体験した戦争とはいかなるものだったか、そして奄美の人々と戦争遺跡との関係がどのようなものだったのかという問題意識のもと、2018年度から共同調査を行っています。この合同調査は、主に鹿児島大学法文学部の文化人類学ゼミ・考古学ゼミの有志と協力して実施してきました。2018年度には奄美大島の龍郷町、2019年には瀬戸内町（加計呂麻島）で調査を行いました。コロナ禍のため2020年度・2021年度のフィールドワークを行えませんでした、2022年度は徳之島の天城町、そして2023年度は伊仙町でフィールドワークを実施してきました。

その結果、戦時下のシマでの生活はだいぶ過酷だったことがみえてきました。

特にどの地域でも聞かれたのは食糧をはじめとする物資不足と度重なる空襲に関するお話でした。そのような辛い記憶以外にも、島に滞在していた部隊との交流の思い出や戦時下での学校生活のようすなど多岐にわたるお話を伺うことができました。こうした「個人的な戦争体験談」を聞くことで、いわゆる「大文字の歴史」ではみえてこない戦争の実情が生々しくみえてきました。

島嶼地域はその地理的な条件も相まって国家の中心部から遠い場所に位置していることが多く、その分政治的にも経済的にも不利な条件におかれています。ましてや、戦争という非常事態においてはより一層厳しい状況になる上に、ともすれば最前線の戦闘地にもなりえます。それゆえ、「シマの戦争」について考えることは、島嶼地域で暮らす人々の未来を考えるためにも重要ではないかと考えています。



加計呂麻島で戦跡を見学する学生たち

奄美分室の活動報告（2025 年 4 月～2025 年 9 月）

<セミナー>

◎第 52 回奄美分室で語りましょう「奄美のウズィに魅せられて」

日時：2025 年 5 月 30 日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：小瀬村岳（奄美海洋展示館）

本講演では、奄美群島に生息するウツボ（奄美の言葉でウズィ）について、分類学的立ち位置、種構成、各種の生息環境といった内容が、骨格標本の提示やフィールドワークの様子を交えながら解説がなされました。



講演する小瀬村岳氏

◎第 53 回奄美分室で語りましょう

「貝を乗り換えて生まれた種－奄美で発見されたカイゴロモの種分化－」

日時：2025 年 6 月 26 日（木）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：香川理（筑波大学下田臨海実験センター）

本講演では、貝殻の上で生育するカイゴロモという藻類の仲間を題材に、種の定義や、種が分化するメカニズムについて、香川氏による奄美でのフィールドワークを交えた解説がなされました。



講演する香川理氏

◎第 54 回奄美分室で語りましょう

「奄美群島の地域振興施策のこれまでとこれから」

日時：2025 年 7 月 3 日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：本田勝規（鹿児島大学南九州・南西諸島域イノベーションセンター）

本講演では、奄美群島の振興施策の基盤となった奄美群島振興交付金の創設に関わった方々の想いと、これからの振興施策についてのお話しがされました。講演後は、会場の参加者による活発な意見交換がなされました。



講演する本田勝規氏

◎奄美市市制施行 20 周年記念 令和 7 年度第 5 回奄美博物館講座

日時：2025 年 7 月 30 日（水）

主催：奄美市立奄美博物館、共催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：平城達也（奄美市立奄美博物館）吉川晟弘氏（熊本大学）北之坊誠也（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

本会では、各氏の専門や携わった海辺の生きもの（サンゴ、ヤドカリ類）を対象に、当分類群の基礎知識や、自身の研究成果について解説がなされました。

< 観察会 >**◎第 1 回・第 2 回 サンゴの産卵観察会**

日時：2025 年 6 月 15 日（日）、6 月 16 日（月）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：北之坊誠也（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、小瀬村岳（奄美海洋展示館）

本会では、奄美大島周辺のサンゴが産卵する様子を観察しました。本来海中で行われる産卵の様子を観察するのは難しいですが、許可を得て採取したサンゴ片を水槽で観察することで、未就学児を含む幅広い年代の人たちが、サンゴが産卵する様子を観察することができました。



サンゴの産卵を観察する参加者

◎サンゴ礁の生物調査体験

日時：2025 年 5 月 18 日（日）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：北之坊誠也（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

本会では、奄美大島長浜においてシュノーケリングで泳ぎながらサンゴの観察を行いました。



シュノーケリングで生物観察をする参加者

◎海の生きもの観察会

日時：2025 年 9 月 20 日（土）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

共催：奄美海洋展示館

協力：大島高校珊瑚研究チーム

講師：北之坊誠也（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、小瀬村岳（奄美海洋展示館）、佐々木渉太（奄美海洋展示館）

本会では、奄美大島大浜海岸において、11 名の参加者と共に海中の多様な生物の姿と生息環境を直に見て学びました。



解説をする北之坊特任研究員（中央）

◎宇検村田検周辺の植物観察会

日時：2025 年 9 月 20 日（土）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：鈴木英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

本観察会では、奄美大島宇検村田検において、17 名の参加者と共に、湯湾岳方面に向かう林道沿いを歩いて、さまざまな植物を観察しました。



林道沿いでの植物観察

<奄美分室で協力したイベント>**第 1823 回 奄美倫理法人会セミナー「知ってる？奄美のサンゴ礁」**

日時 2025 年 4 月 8 日（火）

北之坊誠也特任研究員が講師として参加

高校生向け講座「サンゴ礁と生物多様性」

日時：2025 年 4 月 11 日（火）

北之坊誠也特任研究員が講師として参加

奄美群島サンゴ礁保全対策協議会

日時：2025 年 5 月 19 日（月）

北之坊誠也特任研究員がオブザーバーとして参加

異業種交流会

日時：2025 年 5 月 20 日（火）

北之坊誠也特任研究員が講師として参加

海岸での生物観察
(喜界島サイエンスキャンプ)**第 1837 回 奄美倫理法人会セミナー「奄美のフィラリア症」**

日時：2025 年 7 月 22 日（火）

大塚靖センター長が講師として参加

第 2 回サンゴ礁レクチャー（主催：喜界島サンゴ礁研究所）

日時：2025 年 7 月 19 日（土）

北之坊誠也特任研究員が講師として参加

サンゴ礁サイエンスキャンプ（主催：喜界島サンゴ礁研究所）

日時：2025 年 8 月 2 日（土）～7 日（木）

北之坊誠也特任研究員が講師として参加

第 2 回夏休み自然体験プログラム（鹿児島大学

総合研究博物館・水産学部・教育学部）

日時：2025 年 8 月 22 日（金）～24 日（日）

北之坊誠也特任研究員が補助として参加

外で採集した生物を整理
(喜界島サイエンスキャンプ)

< 奄美分室来訪者数 >

のべ 600 名 (2025 年 3 月 1 日～2025 年 8 月 31 日)

< 奄美分室関連報道記事 (2025 年 3 月～2025 年 8 月) >

2025/3/5	奄美新聞	P5「テーマは『コウモリの翼手』奄美分室で語りましょう」
2025/3/5	南海日日新聞	P7「コウモリの秘密に迫る」
2025/3/6	奄美新聞	P5「『島嶼の野生ユリ』で研究会」
2025/3/8	南海日日新聞	P8「実力者 3 人が共演 聴衆魅了『島唄の饗宴』」
2025/3/9	奄美新聞	P9「コウモリ翼手研究で成果発表」
2025/3/16	南海日日新聞	P8「奄美と本土のコウモリを比較」
2025/4/4	奄美新聞	P5「うがみんしょうらん！ 島嶼研奄美分室」
2025/4/5	奄美新聞	P5「『民謡研究家の仕事』研究会」
2025/4/16	奄美新聞	P8「島の研究分かりやすく 鹿大島嶼研ブックレット発売」
2025/4/19	南海日日新聞	P8「ブックレット 2 冊発行」
2025/4/27	南海日日新聞	P8「研究者ら島トウガラシ調査」
2025/5/3	南海日日新聞	P8「奄美の海でサンゴ研究」
2025/5/16	奄美新聞	P5「鹿大の河合教授が講師『奄美のトビンニャが危ない』」
2025/5/18	南海日日新聞	P7「トビンニャが危ない！自然と共生を考える講演会」
2025/5/21	長崎新聞	「離島の課題を乗り越えるには 島出身の学生や移住者ら 議論」
2025/5/22	奄美新聞	P5「うがみんしょうらん！ 島嶼研奄美分室」
2025/5/22	南海日日新聞	P3「海に潜りサンゴを調査 探究活動で生徒 4 人ら」
2025/5/26	奄美新聞	P1「『共生』を考える 対策構築も課題多く」
2025/6/8	奄美新聞	P9「『トビンニャが危ない』このままでは枯渇」
2025/7/26	奄美新聞	P1「『共生』を考える 連携しながら共有し議論、課題解決へ」
2025/6/30	南海日日新聞	P7「26 年度客員研究員募集」
2025/7/4	奄美新聞	P1「奄美春秋」
2025/7/7	奄美新聞	P8「親子でプログラミング講座」
2025/7/8	南海日日新聞	P7「奄美群島における開発と保全の調和」
2025/7/11	南海日日新聞	P1「自然・文化資源の発信強化へ」
2025/7/12	奄美新聞	P1「沖縄北部との周遊観光期待」
2025/7/13	奄美新聞	P9「環境文化教育プログラム」
2025/7/24	奄美新聞	P9「研究蔵書 1829 冊を伊仙町に」
2025/8/1	奄美新聞	P9「貝を増築する新種イソギンチャク」
2025/8/4	南海日日新聞	P9「研究者が海の生き物語る」

～学生島体験！ vol.21～ 「成長と感動の奄美」

こいけかずき
小池一輝（鹿児島大学大学院農林水産学研究科修士 1 年）

私が卒業研究の地に奄美大島を選んだのは学部 3 年生の 2 月だった。きっかけは当時島嶼研の特任研究員であった牧貴大さんから「奄美大島におけるコウモリの生態についての研究」というテーマで研究をしてみないかとお誘いをいただいたことである。多くの島々と、そこで形成されている豊かな生物の多様性に惹かれて鹿児島にきた私にとって、このテーマは非常に魅力的に思えた。そこから私の奄美大島での研究が始まった。

初めて奄美の地を訪れたのは九州では新緑が芽吹く 4 月終わりから 5 月初めにかけてであった。奄美では既に初夏かと思うような濃い緑や肌にまとわりつく湿気、透き通るような海が私を出迎え、同じ鹿児島でもここまで環境が異なるものかと驚愕した。そんな力強い環境の中で生きる生き物たちは実に多種多様である。森に入るとリュウキュウズアカアオバトの鳴き声やオーストンオオアカゲラの木をつつく音が私たちを迎え、足元では金紫色の斑紋を持つアマミシカワガエルが跳ね、薄暗く水が流れるトンネルではオリイコキクガシラコウモリが静かに夜を待っていた。自分が今まで経験をしたことのないこのような生命力あふれる森に足を踏み入れ、時折スコールが降り注ぐ急傾斜面を登り降りし調査地に録音機器を設置するのは、非常に体に負担がかかった。しかしそれ以上に、充実感が体に満ち溢れていた。

牧さんには奄美の森での調査だけでなく、データの分析方法や情報の調べ方、整理の仕方についてもご指導いただいた。それだけでなく、奄美海洋展示館や奄美野生生物保護センターにもご案内いただき、奄美の生物について多角的に学ぶ貴重な機会を得た。こうした時間は、私の今後の人生において貴重なものであったと思う。

そのためか、10 日間もいた奄美から帰る日には、疲れはもちろんのことだが、寂しさやまた奄美の森に入りたいという思いが胸の中に渦巻いていた。そして驚くべきことに、奄美から帰った私は自分の体力が大幅に上昇していることに加え、自分の物事の考え方の変化や集中力の向上を感じた。私を成長させていただいた奄美には感謝とともに畏敬の念を抱かずにはいられない。

お知らせ

任期満了により退職した牧貴大特任研究員の後任として、2025 年 6 月から菊池隼人特任研究員が加わりました。

編集後期

初めて編集を担当させて頂きました。多様な研究分野・所属の人たちが集う奄美分室の魅力を書き記し、皆様に少しでも伝えることができたら幸いです。
菊池隼人

Facebook Instagram X(Twitter)



島嶼研分室だより No. 21

令和 7 年 10 月 15 日発行

鹿児島大学

国際島嶼教育研究センター奄美分室

〒894-0026

鹿児島県奄美市名瀬港町 15-1 奄美群島大島
紬会館 6 階

TEL: 0997-69-4852 FAX: 0997-69-4853

E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp

<http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/>

表紙写真：

山中から垣間見えた加計呂麻島、佐知克集落
(撮影：菊池隼人、2025 年 8 月)

ISSN: 2189-793X